

定年退職を迎えるにあたって



心理学部 井上 勝也

定年は、社会的には「社会的新陳代謝」だそうだ。確かに”若い者”にとっていつまでも”年寄り”に頑張られたのでは、たまったものではない。口達者であれこれ余計な指図をしたり時には妨害したり、そのくせ体は一向に動かさず、面倒なことはすべて若い者に押しつける。本当は、仕事よりもわが身の健康や年金のことばかり考えているくせに、陰で“老害”と言われるのも当然だ、適当なところでお引き取り願わないと一と、私も“若い頃”は思っていた。ところが、何たることか！今や私自身が老廃物として代謝される側になり、老害と陰口をたたかれる立場になってしまったのだ。

そうなってみると、無節操にも、若い頃の老害論は都合よく忘れてしまうものだ。まだまだオレは、仕事はできる。面倒なことだって引き受けられるし、体の方だって若い頃ほどではないにしても十分に動くのに。それなのに、若い者のために、座り心地のいい椅子から立って？ひどいじゃないか定年は！心理学的には、これじゃまるで「社会的安楽死」じゃないか！こうなった以上断固として、Old psychologists never die; they just fade away. でいくしかない！

「定年」を少しカリカチュアライズして書いてみました。ことばの遊びです(多謝!)。もちろん私の“本心”はこのようなものではありません。もう少し静かなものです。

定年を迎えるにあたって、学生に「惜別の辞」を書きました(「駿河台大学 NEWS 第154号」)。それが今の私の心境ですので、以下に再掲させていただきます。

『期待と活気にあふれたある新学期。最初の講義をすべく、私は新学期特有の少しハイな気分で教室に向かった。きゃあきゃあワァワァという騒音の弾丸と無数の視線の矢が飛んでくるものと思いながら、大教室の扉を開けた。しかし、そこには誰もおらず、うそ寒い空気と教室全体を包んだ深い静寂だけが漂っていた。何のことはない、教室を間違えただけのことだったのだが、しかし一瞬私は、歌やおしゃべりで楽しげな満員のバ

スを一人で見送ったような、奇妙な寂寥感に襲われた。そして思った、— “なんだ、オレは学生に頼っている！” と一。

社員のいない社長などあり得ない。患者のいない医者もあり得ない。お客のいない商店も同じことだ。もちろんその逆、社長のいない社員も医者^のいない患者も商店のないお客も、あり得ない。私達はすべて相互依存しながら生きているし、またそうでなければ生きられない。通常私達は、社会運営上の必要性から、これらの関係に”偉い人“や”有力な人“などといった上下の縦関係を持ち込むことに慣れてしまっているが、下のない上などというものはなく、上のない下もない。その意味で私達は、本質的には上も下もない横並びの「相互依存的存在」なのだ。

^{よわい} 齢 古稀，大学教員生活44年一。私はこの長い間，学生に頼り頼られ，相互依存しながらどうやらここまでやってきた。どっちにしても，学生あってこそその私だったのだ。

その時がやってきた。学生諸君よ，いままで本当にありがとう。元気でな，さようなら！そして，さようなら，駿河台大学。』